

聖徳太子信仰と

日本仏教

名古屋大学特任教授

吉田一彦



聖徳太子童形像・四臣像 四天王寺蔵
大阪市天王寺区 室町時代

日本の仏法の特徴、聖徳太子信仰

聖徳太子と日本の仏法との関係を考える時、重要な論点になるのは、〈聖徳太子信仰〉の評価である。聖徳太子を神仏にも等しい存在として崇拜、信仰する〈聖徳太子信仰〉は、世界の仏法国（および地域）の中で、日本にだけ見られる、日本の仏法の大きな特色である。この小文では、〈聖徳太子信仰〉とは何かについて、近年の研究の進展をふまえて考えてみたい。なお、「仏教」は、明治時代より前は「仏法」と呼ばれることが多かったので、ここでは「仏法」の語を用いるのを基本とし、適宜「仏教」の語も織り交せて論述を進めていきたい。

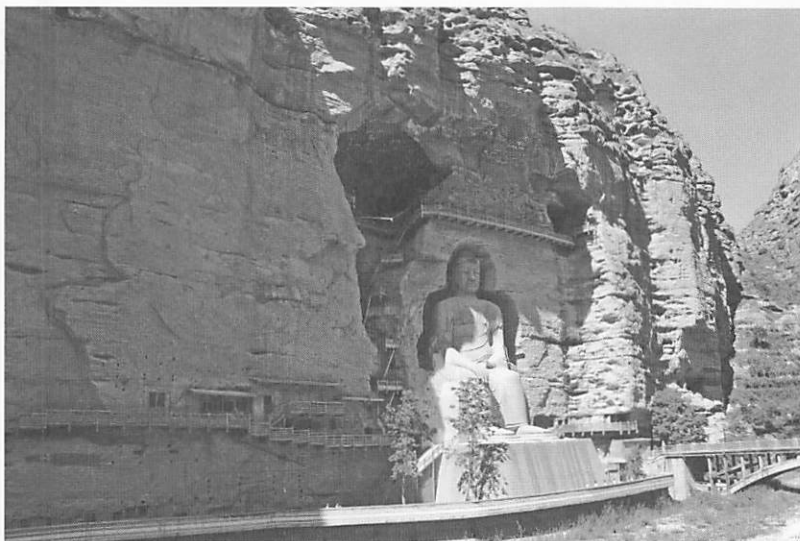
仏法はインドに生まれた宗教であるが、インドのみにとどまることなく、アジアの広い地域へと流通した。中国には、一世紀頃、後漢の時代に仏法が初伝し、四世紀の五胡十六国の時代に、非漢族（胡族）の王朝によって仏法興隆がなされて、広く社会に受容されていった。朝鮮半島の高句麗、百濟、新羅には、四世紀～五世紀に仏法が伝えられた。そして、日本には、六世紀に仏法が初伝した。その後も、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代と、各時代にその時々中国の新しい仏法が日本に伝えられ、日本はそれを積極的に受容した。

飛鳥時代、蘇我馬子は百濟から仏法を受容し、日本最初の本格的寺院である飛鳥寺を創建した。飛鳥寺建立にあたっては、百濟から、仏舍利、僧、および建築、金工、瓦、仏画などに関する技術者が蘇我馬子に贈与された。仏法はアジアの先進文明であり、当時の王権にとつて、それを手に入れることは大きな権益であった。仏法の寺院は、思想、儀礼、建築、金工、瓦、絵画、彫刻、そして聖職者などの当時の最先端の知と技術が凝縮された空間としてそびえたった。

日本では、その後、飛鳥寺に続いて、新堂廃寺（烏含寺）（大阪府富田林市）、豊浦寺（奈良県高市郡明日香村）、北野廃寺（野寺）（京都市北区北野下白梅町）、斑鳩寺「若草伽藍」（法隆寺）（奈良県生駒郡斑鳩町）、四天王寺（大阪市天王寺区）などの初期寺院が造立されていった。

『日本書紀』が造形した聖徳太子

『日本書紀』は、日本国が作成した歴史書の最初のもので、四十年にも及ぶ長い編纂期間を経て、



炳靈寺石窟 中国甘肅省永靖県
五胡十六国時代の仏法の展開を示す
石窟寺院（2017年9月撮影）

養老四年（七二〇）に完成、奏上された。そこには、日本の最初期の仏法をめぐって、蘇我馬子による仏法興隆の事績が記される。蘇我馬子が飛鳥寺を創建したことは歴史的事実と見て間違いなく、今日では出土した遺構・遺物の研究によって、百濟仏法からの影響の具体相が解明されている。

『日本書紀』には、また厩戸皇子の人物、事績があわせ記される。曰く、生まれると直ちに言葉を発した。「聖」の智があつた。一度に十人の訴えを聞いて弁別することができた。「未然」（未来）を予知する能力があつた、と。同書では、「厩戸皇子」（厩戸豊聡耳皇子）「上宮厩戸豊聡耳太子」などと表記は、一般人を超えた、特別の能力の持ち主として造形されているのである。また、推古二年条の片岡遊行説話では、厩戸皇子は、道に倒れ伏している飢者が、凡人ではない「真人」であることを見破つたと記され、「聖」は「聖」を知るとの論評が語られている。さらに、厩戸皇子の死去の場面を記す推古二九年条では、太子の仏法の師である高麗の僧の慧慈が、太子は「玄聖の徳」をもって「日本の国」に生まれた「聖人」と述べており、太子も慧慈もどちらも「聖」であつたとの論評が明記されている。

このように、厩戸皇子は『日本書紀』において、只人ではない、「聖」「聖人」であると記されている。だから、厩戸皇子を特別視し、聖人聖徳太子として信仰する（聖徳太子信仰）は、早くすでに『日本書紀』において開始されていると言つてよい。彼は、神武天皇、神功皇后、日本武尊、武内宿禰などと同様、『日本書紀』によって創作、造形された理想的な人物像の一人であつた「大山一九九八」。さらに、『日本書紀』用明元年条には、厩戸皇子は、政治に関しては万機を総摂して「天皇の事」を行つたとあり、他方、仏法の宣揚に関しては「法大王」「法主王」の名があつたともある。だから、『日本書紀』において、彼は、王法（政治）と仏法の両方の主催者、統括者であつたと記されている。これは重要な記述である【吉田二〇二〇】。

中世の日本では〈王法仏法相依説〉が熱心に説かれた。これは、「王法」と「仏法」が掛けあひ、車の両輪となつて連携、補完しあふことによつて国家・社会が統治されるとする思想で、日本の国のかたち、国家のあり方を説く思想であつた。その初見史料は、注目すべきことに、十一世紀初頭に四天王寺で作成された『四天王寺御手印縁起』であるという【上島二〇一〇】。四天



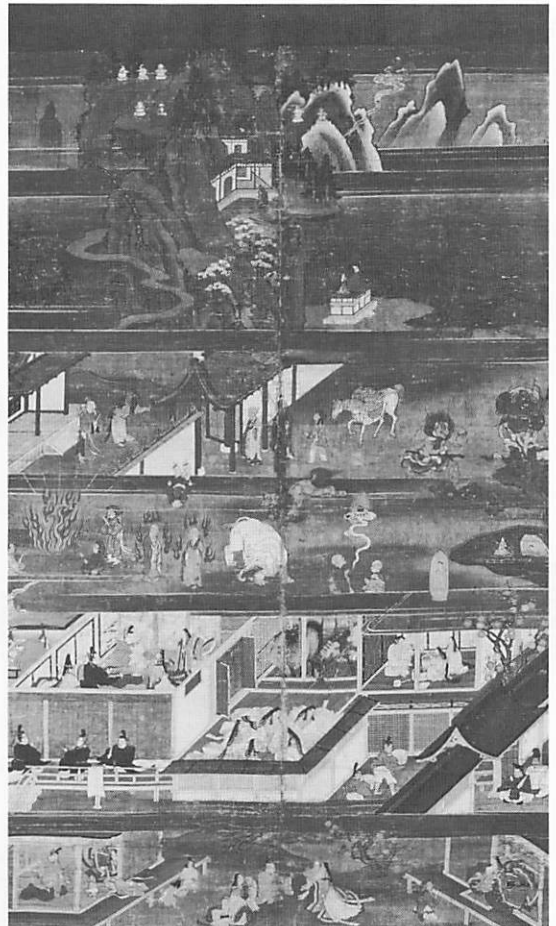
四天王寺 聖霊殿 大阪市天王寺区（2017年2月撮影）

王寺は、言うまでもなく〈聖徳太子信仰〉の中心寺院であった。四天王寺は、『日本書紀』において厩戸皇子が王法と仏法の両者を一身のうちに統括したと記されることに注目し、これを継承、発展させて〈王法仏法相依説〉を創出、主張した。この思想は、当時の寺院社会・貴族社会に受け入れられ、日本中世の政治思想の中心の一つになっていった。

寺院の聖徳太子信仰

〈聖徳太子信仰〉は、神社ではなく、寺院で語られた。それは、日本の神道の信仰ではなく、日本の仏法の信仰として展開し、今日に至っている。奈良・平安時代、〈聖徳太子信仰〉の中心になったのは四天王寺、法隆寺であり、さらに広隆寺、橘寺などがこの信仰を宣揚した。これらの寺院は、聖徳太子の業績を聖徳太子伝として語り、その中に自らの寺院と聖徳太子との関係を書き込んだ。「伝」という形で仏教者の業績を讃嘆・宣揚するという方法は、日本には鑑真（がんにん）（六八八〜七六三）の一行によって本格的に伝えられたと考えられる。現存最古の聖徳太子の単独伝記は、鑑真とともに来日した思託（しんたく）が延暦七年（七八八）に著した『延暦僧録』の中の「上宮皇太子菩薩伝」である。

これに前後して、日本の寺院が鑑真の影響を受けて、聖徳太子伝を作成するようになった。それはまた中国の影響で、絵画をもって表現されることもあった。中国の石窟寺院の壁画に描かれるような絵伝が、聖徳太子を題材に描かれるようになったのである。その中心となったのは四天王寺である。同寺では、聖徳太子伝が複数回作成され、やがてそれらは平安時代中期に『聖徳太子伝曆』として大成された『柗原二〇一三』。同書は、その後、〈聖徳太子信仰〉の発展に巨大な影響を及ぼす書物となった。これには、自らに先行する四天王寺の聖徳太子伝として「在四天王寺壁聖徳太子伝」があったと記される。ここから、四天王寺に、すでに現在の絵堂の前身になるような施設があり、その壁に聖徳太子伝が絵伝として記されていたことが知ら



聖徳太子絵伝 鶴林寺蔵 兵庫県加古川市加古川町 鎌倉時代 重要文化財



聖徳太子坐像 鶴林寺蔵 平安時代

れる。また、鑑真一行は、肖像彫刻という中国文化を日本に伝えた。日本における僧の肖像彫刻の初例は、鑑真和上像（唐招提寺蔵）である。やがて、聖徳太子の像が、絵画ばかりでなく、彫刻でも作成されるようになっていった。

四天王寺に続いて、他の寺院も聖徳太子伝を作成した。広隆寺が作成したのは、『上宮聖徳太子伝補闕記』である。法隆寺の聖徳太子伝としては、五つの断片から構成される『上宮聖徳法王帝説』が現存している。また、逸文しか残存していないが、橘寺も『上宮厩戸豊聡耳聖太子伝』という聖徳太子伝を作成した。なお、法隆寺には、延久元年（一〇六九）、秦致貞の作の聖徳太子絵伝の障子絵が伝わってきた。それはかつて東院の絵殿を飾るものだった（現在は国所蔵）。

これらの寺院は〈聖徳太子信仰〉のライバルの関係にあり、ために各寺院の聖徳太子伝には、小さくない差異が見られる。驚くべきことに、聖徳太子の生没年、死去日、年齢といった基本情報にすら違いがある。さらに、太子の種々の事績を記した説話にも大きな差異がある。その差異は、相手の寺院の言い分を否定、あるいは吸収しようとする目的で言説されたものであった〔吉田一彦二〇一一〕。

鎌倉仏教の聖徳太子信仰

鎌倉時代になると、新しく誕生した鎌倉仏教の世界に〈聖徳太子信仰〉が浸潤、展開していった。中でも、親鸞（一一七三―一二六三）を祖とする親鸞系諸門流（初期真宗）の〈聖徳太子信仰〉や、忍性（一二一七―一三〇三）など律宗による〈聖徳太子信仰〉は、よく知られている〔吉田編著二〇一一〕。これら新仏教の特色ある〈聖徳太子信仰〉の淵源となったのは四天王寺である。

四天王寺では、十一世紀に、同寺西門は極楽浄土の入口の門であるとの信仰が宣揚され、多数の人々が参集、参拝した。これに伴い、多くの〈念仏聖〉たちが西門を拠点に新しい信仰を発信した。それは、聖徳太子信仰と阿弥陀信仰（浄土教）の結合であった。「聖」とは地域社会や民衆層に布教した僧で、諸国を遊行して活動したり、あるいは貴賤の信仰を集めた



四天王寺 西門 石の鳥居から西大門を望む (2017年2月撮影)

寺院などを拠点に活動した。その中には、下層の僧や寺院社会を離脱(遁世)した僧がいた。彼らのうち、念仏をもっぱらにする聖が(念仏聖)である。

親鸞は(念仏聖)であった。親鸞および彼の弟子や孫弟子を祖とする門流には、阿弥陀如来の念仏の信仰とともに、強い聖徳太子信仰が見られる。親鸞は、四天王寺と密接な関係を持つ、京都の六角堂(頂法寺、京都市中京区六角通東洞院西入堂之前町)において、浄土教と聖徳太子信仰が結合した信仰を吸収したものと思われる。だから、親鸞は(念仏聖)であると同時に(太子聖)でもあり、二つの信仰をとともに宣揚する聖であった。今日、親鸞系諸門流の流れを汲む寺院には、聖徳太子の絵画、彫刻、絵伝が多数伝えられている。その中には、右手に笏、左手に柄香炉を持つ像が多数ある。浄土真宗では、これを聖徳太子の「真俗二諦像」と呼んでいる。この姿の聖徳太子像は、もともとは四天王寺で造形され、発展したものである(「扉の図版参照」)。二つの持物のうち、笏は(王法)を、柄香炉は(仏法)を表象するアトリビュートになっている。この姿の聖徳太子像について、後藤道雄氏は、私見を勘案して(王法仏法相依像)と呼ぶべきだと説く。私もこの意見に賛成である[後藤・吉田二〇二二]。

(聖徳太子信仰)は、律宗や親鸞系諸門流の布教によって、寺院社会・貴族社会ばかりでなく、社会の周縁部、下層の民へと流通、浸潤していった。聖徳太子には(天皇代理者)という重要な側面がある。(聖徳太子信仰)の新たな展開は、皇室への敬愛、尊崇の念の醸成に寄与し、日本の天皇制度の思想が社会の周縁部や下層の民へと浸透していく契機となった。(聖徳太子信仰)は、長く続く日本の天皇の王朝を支える、精神的、思想的な支柱の一つとして機能した。

参考文献

- 上島亨「日本中世社会の形成と王権」名古屋大学出版会、二〇一〇年
大山誠一「長屋王家木簡と金石文」吉川弘文館、一九九八年
後藤道雄・吉田一彦「律宗と親鸞系書門流の聖徳太子信仰」(佐々田悠・松田淳一・関口寛編「差別と宗教の日本史」法蔵館、二〇二二年)
榎原史子「四天王寺縁起」の研究」勉誠出版、二〇一三年
吉田一彦編「変貌する聖徳太子」平凡社、二〇一一年
同「聖徳太子信仰の基調」(同右書所収)
同「天皇代理者への崇拜」(道元徹心編「日本仏教の展開とその造形」法蔵館、二〇二〇年)



鶴林寺 太子堂
平安時代 国宝